

## 身体運動の記号論序論

森 知 高 (体育理論)

### はじめに

体育の定義をなすことは、体育を研究するものにとってはアルファでありオメガであろう。

かつての「身体の教育」(education of the physical)と定義された時代を経て、「身体を通しての教育」(education through the physical)が体育の定義として定着しつつあった。しかし、西独を中心に見られる Leibesübungあるいは Leibeserziehungから Sport への教科名の移行、米国を中心とする Human Movement 論の台頭は、「身体を通しての教育」がいつまでもその地位を不動のものとなしえない証でもあろう。

工藤によれば「1964年ころから human movement の運動が台頭し、体育は disciplin か、という学問的な要求に答える形で表面化し、1970年代からは、human movement を対象としての the art and science が体育の有力な概念として浮かび上ってきた<sup>(1)</sup>。本論文は、体育の定義にかかわって脚光をあびている human movement (身体運動<sup>(注1)</sup>)を対象として考察がなされる。“身体運動は記号論の対象となるか”がその主題となる。身体運動を一種の記号として捉え、解釈することができれば、体育における種々の側面に多大な利益を与えるものと思われる。

### 方 法

「Human Movement がどのようにして、いつ重要な概念となったかを決定することは困難である…が…メセニー(Eleanora Metheny)は最も影響力ある指導者<sup>(2)</sup>」であった。彼女は種々の論文で身体運動の概念の重要性を説いている。又、メセニーはエルフェルト(Lois Ellfeldt)とともに“Movement and Meaning : Development of a General Theory”<sup>(3)</sup>を著し、そこでランガー(S. K. Langer)やカッシラー(Ernst Cassirer)の象徴形態の理論をもとに、身体運動を一つの重要な象徴形態として捉え、身体運動の記号論にかかわる新し

い用語を提出している。確かに、ここに創出された用語は「全く新しい一連の概念を取り扱っている」こともあり、すでに「創始者自身が、現在ではすでにそれらの用語を用いなくなってしまったようである<sup>(4)</sup>」が、身体運動を記号論的に取り扱う時、避けて通ることができない道であり、そこに新たな視点で検討を加えることは身体運動の記号論構築の手がかりになるものであろう。

本論文では、このエルフェルトとメセニーの創出した用語に焦点をあて、その用語の妥当性について検討する。検討はメセニー等がその基礎を置いたランガーの記号とシンボルの理論からの類推と、若干の著者との対比によってなされる。

### メセニーの用語

メセニーはカッシラーとランガーを引用しながら、“送信器”でない“変圧器”にたとえられる人間の精神に着目し、感覚知覚をシンボルに転換できる能力の第一のあらわれは話すことであるとす。しかし、言語で表わせない非論弁的領域もそこに特有の意味を有し、音楽、絵画における感覚素(音楽ならばそこで使用される音)と同様に、身体運動の運動感覚的知覚もシンボルに転換されると説いている。そこで、身体運動の知覚認識およびその意味に関する一般理論を構築するために、すべての運動形態に共通な要因として認められる一般的な語いが不可欠であるとし、次の用語を提唱した。

キネストラクト(Kinestruct)―運動時の身体各部によって構成される動的な身体形式

キネセプト(Kinescept)―キネストラクトを筋肉運動として知覚することによって生じる感覚形式

キネシンボル(Kinesymbol)―状況の社会的・心理的・身体的脈絡の中で、キネストラクトとそのキネセプトの意味を抽象することによって得られる概念的形式

運動経験は、まずキネストラクトとして表明され、このキネストラクトはキネスセプトとして知覚される。そして、キネスセプトは他の知覚形態と同じく、概念形態が変容しやすく、その感覚データの象徴形態はキネシンボルとして確認されるのである。もちろんこのようなキネシンボルは、他の概念的象徴形態と同じく人間思考の要素でもある。<sup>(5)</sup>

**記号とシンボルの関係**

メセニーは身体運動をシンボルとして捉えることができると仮定し、新しい用語を創出することによって、その理論構造の基礎としようところみたわけであるが、創出された新しい用語の記号論としての位置づけを検討する前に、シンボルに関する若干の検討が必要になってくる。

以下、シンボルを1. 位置づけ 2. 論理 3. 形式の三点から述べる。

**1. 位置づけ**

シンボルは記号の一種と考えられている。しかし、ゴロー (Pierre Guiraud) もその書の注で述べているように、「シンボルという語は人によって、きわめて違った意味で使われている。<sup>(6)</sup>」一つ言語を例にとってみても、言語をシンボルとする者と、それはサインでしかない、とする者に別れる。しかし、それらの各々を検討してみると、シンボルの存在を否定してはいない。彼等の見解の違いは、その対象がシンボルとして作用しているかいないかにかかっている。広辞苑によれば、シンボル (この語は日本語の象徴に当てはまるとしている) は、「想像力に訴える何らかの類似によって抽象的な或る事物を表わす記号」となっている。

小林は記号を「一般に、われわれの思想、感情をなかまのものに通達すべき物てき手段」とし、物的を規定して「精神てきに対し、感情てきに与えられたもの、いいかえれば、われわれの知覚し得べきもの」であって「かならずしも目方のある物体である必要はない」<sup>(7)</sup>としている。

記号が機能するためには、三つの項が必要である。それは主観と記号と対象である。記号と対象はすべて連関づけられている。この連関には大別して、二つの型がある。自然的連関と人為的連関であり、それぞれにおける記号が自然的記号と人為的記号である。自然的記号とは、自然の中での諸現象間に実在する諸関係に基づき、人為的記号とは、人間の (あるいは動物の) 作り出したもの

である。



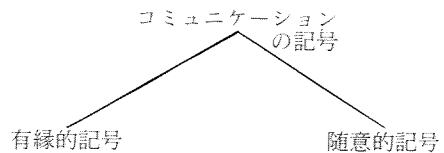
(図-1)

人為的記号は、更に二つに分けられる。一方は実在する物を表象するために役立ち、もう一方は他人とのコミュニケーションのために使われる。しかし、この二者の間の境界ははっきりしたものではない。表象の記号をコミュニケーションの記号として利用することは、しばしば生じることである。



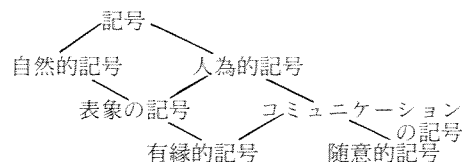
(図-2)

コミュニケーションの記号は、本質的に規約的なものである。それらの意味は、それを使う主体間の協定によって生じるが、その規約には、有縁的なものと、随意的なものがある。つまり、記号とその対象の間に、必然的関係がない時、この記号は随意的であると言われ、偶然的であるとは思われないような時、これを有縁的であるという。



(図-3)

以上、図-1、図-2、図-3をまとめると次の様な図-4が得られる。



(図-4)

われわれ人間は、単に感覚だけでなく、シンボルと意味を用いて、その世界を形成する。動物的な記号使用は、自己保存、成長、生殖、種の保存など生物の基本的欲求のために、感覚通信を筋や腺に伝えるためになされる。しかし、われわれ人間は心的作用を行う精神を有している。精神は生物的欲求のためにのみ作用しはしない。が、精神といえども、自然の器官であるがゆえに、人間生活を構成する自然への反応に無関係なことは何一つ営んではいない。また、精神は単に経験事項を結合することのみで作用しているのではなく、それ以外に何か別なこと、あるいは何かそれ以上のことを営んでいる。芸術に対する真剣さや、夢の存在が精神のこの不思議な営みを証明するであろう。上記の精神に関する二つの営みは何を表わしているのであろう。精神はある人間に特有な欲求の充足のための器官なのではなかろうか。この点をランガーは「人間には他の動物が持たない基本的な欲求がある<sup>(8)</sup>」と仮定している。この基本的欲求を充たすためには、粗雑で原始的な仕方から、意識的で洗練された仕方に到る、つまり、基本的で下等な形態から、派生的で高等な形態に到るまでの段階がある。この諸段階で、「思い憧れる空想」「非動物的な目的」「価値の意識」「非実践的熱狂」などが生じ、また充たされるのである。では、この基本的欲求とは何であろうか。ランガーはこれを「シンボル化の欲求<sup>(9)</sup>」であるとする。後に、詳述するが、シンボルは思考の材料であるゆえに、思考する生物体（すなわち人間）は、経験（あるいは諸知覚）を絶えずシンボルに翻訳しているのである。では、シンボルに翻訳された経験はどのような過程を通過するのであろうか。ランガーは「すべて精神に記録された経験は行動に終わる性質を持ち<sup>(10)</sup>、以上をまとめて、経験—知覚—精神—行動という「シンボル過程」を仮定している。

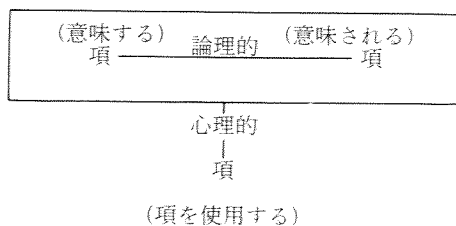
これらから、すべての感覚条件をシンボルにするという、人間に特有な基本的欲求によって人間は思考し、行動するのであるという仮説がなされる。その基本的欲求にのっとって、人間は感覚器官に与えられた経験を、他の動物がなすと同じ実践的行動に終わらせる場合もあり、人間に特有な行動として認められているものに到らせる場合もあるのである。この人間特有の行動に終わったものは、他のどのような媒介も適切に表現できないような経験のシンボルへの転換である。

## 2. 論 理

ランガーはサインは「行動の基礎」であり「行動を命ずる手段」であるとし、シンボルは「思考の道具」であると結論づける<sup>(11)</sup>。

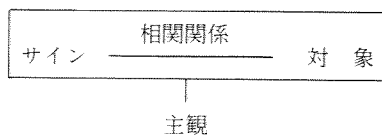
この結論は、サインとシンボルの根本的な相違は意味機能について第三者である主観が、それらを利用する仕方の相違である、ということから導かれる。

意味とは「性質でなく項(term)の機能である<sup>(12)</sup>」とランガーは説明する。すなわち、意味に論理的面と心理的面を考え、論理的につながった諸項と、心理的につながった諸項の存在を仮定する。論理的につながった諸項とは、意味する項と意味される項の連合であり、心理的につながった諸項とは、論理的につながった各々の項とそれを用いる項の連合である。(図-5 参照)



(図-5)

サインでは、この項が三個あれば事足りる。サイン項、対象項、主観項である。サインと対象の両項は、論理的結合をなし、これは1対1の相関関係をなしている。主観はこの一対を成している項を使用し、サイン作用を働かせるのである。



(図-6)

この対は、前述した自然的なものでも自為的なものでもどちらについても成り立つ。自然的サインとは、街路が濡れていれば、雨がふったサインであり、月がカサをかぶれば雨の降りそうなサインということである。人為的サインとは、燈台の灯は岬を示すサインであり、ベルは人が来たサインということになる。すなわち、サインは自然的、人為的にかかわらず、「事物、事象、または状況が、一過去、現在または未来において一存在したこと、

すること、またはするであろうことを示す。<sup>(13)</sup>

しかし、街路が濡れるのは、雨によるだけではない。散水車が通った跡かも知れない。ベルは食事の合図かも知れないし、起床の合図かも知れない。一つのサインは極めて多数の事柄を意味しえるために、われわれはとかくその解釈を誤りがちになる。

主観は一对となっている項に作用すると同時に、それら各々とも関連している。これによって一方の項がサインとなり、他方の項が対象となる区別が生じるのである。すなわち、一方の項が他方の項より興味の多いこと、利用しやすいことが、その区別となる。関連している一項が他項より知覚し易い時、サイン作用がその項に所属するのである。もし、これらの項の間に、それらの区別がない時、それは相互に交換可能である。

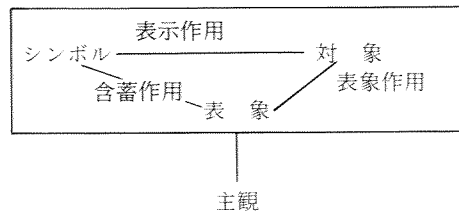
さて、主観は、サインによって報告された対象を解釈する。この解釈が動物的知能の基礎に他ならない。それは最も初歩的で、最も具体的な種類の知能であり、われわれ人間も動物と共通に持ち、全く経験によって獲得し、明白な生物学的用途を持ち、明白な真と偽の基準を持っている。この知能が動物（人間を含む）に行動を起こさせ、命じるのである。

シンボルには、四つの項が必要である。シンボル項、対象項、主観項そして表象項である。シンボルと対象、シンボルと表象、表象と対象の間にはそれぞれ論理的関連があるはずである。シンボルと対象の間にある複雑な関係は、表示作用と呼ばれる。この関係は一般に認められている通り、必然的な因果関係はない。従って、ハトは平和のシンボルになるが、煙は火のシンボルとはならない。シンボルと表象との、いっそう直接的な関係は、含蓄作用と呼ばれる。そもそも表象とは「知覚に基づいて、意識に現われる外界対象の像」<sup>(14)</sup>であり、これには、対象が現前している場合、記憶によって再生される場合、想像による場合があるのである。そして、この含蓄作用によって、シンボルは、その表示する対象が存在もせず、期待もされない時、（つまり、必然的な因果関係がない時）われわれは対象に対してあからさまに反応することなく、その対象について考えることができるのである。

これを補償するために、表象と対象の連関は、明らかに存在し、それは表象作用と呼ばれる。

（この連関の仕方は、概念と関係して後述する。）

以上の論理的相関に主観が関与し、そこにシンボル作用が生じるのである。（図-7参照）



(図-7)

シンボルは主観を導いて、その対象を表象させるといふ作用をなす。したがって、「シンボルが直接的に意味するものは、表象であって対象ではない。」<sup>(15)</sup>動物にこの作用は生じない。次に述べる概念の問題とも相伴って人間はシンボルによって合理的思考を行うのである。

そもそも概念とはいかなるものであろうか。哲学辞典によれば「判断において結合される表象を、主観における表象作用から切り離して捉えるとき、その内容を概念と呼ぶ。」つまり、表象は感覚的、具体的な点で明らかに概念と区別されるわけであるが、概念を把握するにあたって重要な要因となっている。本来、「シンボルが真に運ぶものは概念だけである」<sup>(16)</sup>が、その概念が、われわれに対して、シンボルによって示されるやいなや、われわれ自身の想像力は、それを私的で個人的な表象によって装うのである。しかし、われわれは、経験、感情、および純粋な個人的連想について、そこに個人差があるにもかかわらず、同じ対象について通じあえるのは、その対象についての正しい表象があるからである。この共通に持たねばならないパターンが、その対象についての概念である。ここで、当面の対象の内包を示すことができるものは、様々な姿をとっている思考あるいは心像（すなわちシンボルによって主観に作用したもの）のいずれのなかにも具体化してくる形式（相異なる主観の精神にとっては、別々の感覚でおおわれた形式）である。この具体化する或る形式以外を概念に無関係とみなす能力は、絶えず精神のなかで行われている無意識な抽象作用の過程になる。すなわち、個人的な表象と伝達可能な公共概念の区別は、この抽象化の過程によって可能になる。抽象的にもものを見ることは、人間の合理性の基礎

である。

以上より、或る概念を取り扱う時、われわれは常にそれについて或る特定の表象の仕方を用い(その表象はシンボルに連関している)、それを通して概念をつかまねばならぬと言えよう。

### 3. 形 式

シンボルとして取り扱われるものの代表として言語がある。言語はきわめて経済的なシンボルであるとともに、生得的に使用できるシンボルでもある。しかし、言語が経済的で表現性に富んでいるという反面、言語でないようなどんなものもシンボルとしての表現性を持つことができないとされてきた。つまり、言語によって表現できないもの一主観的な経験、情緒、感情および願望の領域—は、兆候だけが形而上学的で芸術的な形をとって、われわれの中に現われ、それは心理学の領域で解明、理解されるしかなかったわけである。これは次の仮説によって裏付けられて来た。すなわち(1)言語は思想を明晰に表現するための唯一の手段であること、(2)言語で表現しうる思想でないものは、すべて感情であること。これらの仮説は、前述したシンボルは思考の道具であるということに裏打ちされている。すなわち、思考は言語によってなされるのである。その時、すべての思考は言語の形式に従わねばならなくなる。すべての言語は、対象に対する観念を一行に並べてつないでいくよう要求する形式を持っているので、この特殊な順序に並べうる思想のみが曲がりなりにも語られることができ、この投影に適さないどのような観念も言語には表現できず、言語によって伝達もできなくなる。言語的シンボルのこの性質を、ランガーは「論弁性」(discursiveness)としている。

さて、われわれは単にこの論弁性を持ったシンボル体系によってのみ表現し、思考しているのだろうか。確かに、この論弁的シンボル体系のみを観念の担い手として承認している限り、思考は言語から始まり、言語に終るであろう。しかし、われわれは、われわれの経験するこの現象的な時空間的世界の中に、言語文法的な表現図式に適合しない諸事物が存在することを確信している。それらは、必ずしも識別できず、表象できない神秘的な事柄ではない。もし、そうでないならば、われわれは、ただ私的な感情のまったなかで、漂いながら、たまたま言語的シンボルによって思考して生活しているにすぎない。確かに、それら諸

事物、諸感情を言語によって表現することは困難であるが、それらは論弁的な言語以外の或るシンボル体系によって表象されることが出来る。これら論弁的シンボル体系と異なるシンボル体系をランガーは「現示的」(presentational)シンボル体系と呼んでいる。それは、論弁的と区別するためであり、又、それらの非論弁的シンボルが、同時的、全体的現示によって、その機能を持つからである。すなわち、人間精神は、人間の感覚諸器官とその特有な諸機能によって、はじめて作用することができるわけであるが、感覚器官は対象をある形式としてとらえ、人間精神に供給している。その供給された形式が論弁的であれば、言語として表現されることが出来るし、非論弁的であれば、なんらかの現示的シンボルとして表現されることが出来るわけである。感覚器官によって行われた抽象—知覚された諸形式—はシンボル素材であり、理解の媒体である。(ここにこそメセニーが新しい用語を創出し、身体運動を現示的シンボルとして捉えようとした源泉があると思われる。)われわれはその形式の機能によって事物の世界と表象の世界を理解するのである。

論弁的なシンボルは、又、個人の感情を表現するには適していない。言語は単に或る種の漠然とした、また粗雑に知覚された状態を命名するにすぎず、たえまなく動く諸パターン、すなわち、内的経験の持つ対立や錯綜、思考や印象と感情の間の相互作用、記憶と記憶の反響、つかのまの幻想をそのまま伝えようとすることは不可能である。そのような感情は、個々の対象の直接的、同時的な現示によって主観に生じるのである。

### 考 察

メセニー等は、多くランガーの言を引用しながら身体運動を一種の象徴形態と解してきた。

ランガーは言語のシンボルとしての有用性を、1)微妙な変化をきわめて容易に作り出し、その知覚、区別も容易である、2)何らの道具も使用せず経済的であり、生得的に使用できる、3)記号としての価値以外なんらの価値も持たず、物質的な現存を意識せず、その内包、外延その他の意味だけを意識する、4)容易に組み合わせることができる、点とし、言語の論弁的シンボルの位置を不動のものとしている。

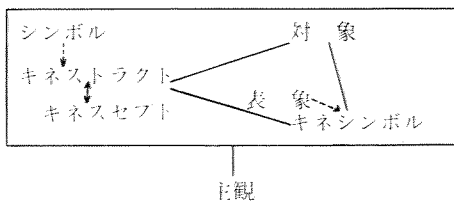
メセニー等は、このランガーの手法に酷似さして、身体運動(彼女等の表現によればキネストラ

クトとキネスセプト)のシンボルとしての有用性を、1)筋の緊張はあらゆる種類の微妙な変化を作り出すのがきわめて容易であり、その知覚、区別も容易である、2)身体機構のほかには何らの道具も使用せず経済的であり、生得的に使用できる、3)生活の一部であるため、その物質的な現存を全く意識しなくなり、その内包だけを意識する、4)容易に組み合わせができる、点としてあげ、言語と全く同様の地位を与え、身体運動を非論弁的(現示的)シンボルとして取り扱っているのである。

そこで、メセニー等が創出した用語の妥当性を問うわけであるが、それは、記号とシンボルの関係の中で示した図-6、図-7にかかわってなされる。もし、メセニー等が言うように、身体運動をシンボルとして取り扱うことが可能であれば、図-7に相当するものが身体運動にかかわって存在し、それが彼女等が創出した用語と関係してくるのではなからうかというのが、ここでの私の仮説になる。

小林は、記号によって通達される意味を所記と呼び、意味を通達すべき物てき手段そのものを能記と呼んでいる。<sup>(19)</sup>これを図-6に当てはめてみれば、サインは能記に相当し、対象は所記に相当する。また、図-7に当てはめてみると、シンボルは能記に相当し、表象(対象と表象のかかわりは前述した)は所記に相当する。

また、小林はシンボルとしての条件を1)記号の必然性、2)情感刺激性、3)使用者の個性の反映<sup>(20)</sup>にみている。このことは、前述してきたシンボルの論理、形式から類推可能な条件であり、身体運動を図-7に当てはめて考えることも可能になってくるように思える。メセニー等の用語とその説明から図-7は次の様に置き換えられる。



(図-8)

キネストラクトとその感覚形式としてのキネスセプトは能記の機能を果す。キネストラクトとそのキネスセプトの意味を抽象して得られたキネシ

ンボルは所記に相当する。

創出された用語はそれぞれ相当する位置を図-7の中に見出すことはできた。しかし、一見して単純な矛盾に気付く。本来ギリシャ語の *kinein* (動くこと)と *structure, perception, symbol* の合成語として創出された用語が、その妥当な位置についていないことである。語感のみからすれば、キネシンボルは、キネストラクトとキネスセプトの総称であり、表象にあたる用語は新たに創出されねばなるまい。

#### おわりに

本研究は、シンボルの論理とメセニー等が創出した用語の単純な比較に終わってしまった。もし、図-8が成立可能ならば、キネストラクトとキネスセプトの新しいかかわりも検討されねばならない。すなわち、主観自身のキネストラクトと客観としてのキネストラクトでその関係は多いに違ってくる。それは身体を取り扱う者に常につきまとう知覚、認識の主体はまた客体でもあるという二重の機能の解明にも役立つかもしれない。また、記号とシンボルの関係で述べたシンボルの特性を身体運動に当てはめる作業はほとんど残ったままになっている。

注1. 本論で使用した身体運動はすべて *human movement* と同意である。

注2. *The Third Dimension in Physical Education* JOHPER25 March, 1954  
*Connotations of Movement in Sport and Dance*: Wm. C. Brown Company Publishers 1965 などが掲げられる。

注3. 記号とサインは用語を使いわけた。記号はシンボルを含んで使用した。

#### 引用文献

- (1) 工藤英三「近年におけるアメリカの体育概念」  
 体育学研究23巻1号1978 P.75
- (2) *Ibid.*, P.77
- (3) L. Ellfeldt and E. Metheny, "Movement and Meaning: Development of a General Theory"  
*The Research Quarterly*, Vol. 29, No.3, 1958
- (4) Daryl Siedentop 高橋健夫訳「楽しい体育の創造」大修館書店 1981 pp.157-158
- (5) 浅田隆夫「身体運動の現象学的論考(序)」

- 体育の原理第7号 不昧堂出版 1972  
P.226
- (6) Pierre Guiraud 佐藤信夫訳「意味論」  
白水社 1971 P.21
- (7) 小林英夫「言語学通論」三省堂 1973  
P.44
- (8) S. K. Langer 矢野万里他訳「シンボルの哲  
学」岩波書店 1975 P.46
- (9) Ibid. P.47
- (10) Ibid. P.56
- (11) Ibid. P.75
- (12) Ibid. P.64
- (13) Ibid. P.67
- (14) 新村出編「広辞苑」岩波書店
- (15) Langer. P.72
- (16) Ibid. P.86
- (17) Ibid. PP.90-91
- (18) L. Ellfeldt and E. Metheny P.270
- (19) 小林英夫 P.45
- (20) Ibid. P.52